

生きがいについて

—— 覚え書 ——

上田 閑 照

生の真の根源性と充実は、死と虚無の問題を解脱してはじめて現実となるであろう。仏教では生死なき生死と言われる。或は、「自己なし。自己なければすべてが自己」、「放てば満てり」、「無一物中無尽蔵」と言われる。而もそれは日常の一挙手一投足、一息一息も既にその事実であるような「死して甦る」である。この事の自覚覚他が課せられている。

エックハルトは「何故なしに生きる」と言い、「無意味が無数回、さらばよし！」がニーチェの最高の肯定の方式であった。

「生き甲斐がない」と言い、そして「鯛は食わない」と言う。「鯛は安いから食わない」と言う。食卓の小さな一片の鮭も北洋漁業の遭難と無関係ではないことを知るや。

子供のノイローゼが増えているようだ。その治療法としての Sandspiel (日本で言う箱庭療法の如きもの)。砂を手でグッと握った実在感。自分で作り、作ったものを自分で崩す自由。

東京迄新幹線で三時間。嘗ては特急で八時間。五時間の余裕が出来たわけではない。逆に、新幹線のテンポがこの五時間をも巻き込み、加速度的になる。一つの疎外。最早、「技術と社会」の問題につきない。どんなに速く動いても加速度的化されないようなゆるやかな広い空間を自分のうちから開き出すことが出来るかどうか。

十牛図(——真の自己、「自己ならざる自己」になる道程を十の場面に分けて図示したもの——)の第八図は何もえがかれていない空円相である。第七迄に到り得たものはここですべて捨てし

められ、絶対に「自己なし」。絶後に再び蘇った第九図には、川の流れと花の咲く木がえがかれている。「水は自から茫茫、花は自から紅」。これが「自己なり、或る自己」の無我性の謎った具体である。水が流れ花が咲くことが、自己の無我の遊戯である。次の第十図には老若二人の出会いが示されている。「自己ならざる自己」が、出会い交りつつある二人になっているのである。真の自己はその無我性の故に自他という二倍になる。いわば無のペースで交わることによって、自他の交りそのものが自己なのである。

第八の無、第九の自然、第十の人間、この三局面の相即相入と互転のうちに真の自己が現起する。真の自己としてのこの動的聯繫は、一方、無限の向上を求めると共に、他方道で出会って「やあ、今日は、ひどい雨ですね」という時、完全に現実であり得るものである。又そのようなものとして、ニヒリズムの問題、自然と人間の問題、人間と人間の問題に対する或る原始的な示唆を含んでいるように思われる。

本稿は第四回大会シンポジウムの要旨である。

(つえだ・しずてる、宗教学、京都大学教授)